

隠された祝福

2006. 8. 13 (日)
西軽井沢福音センターにて
ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

ヘブル人への手紙 12章3節から10節

あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。あなたがたはまだ、罪と戦って、血を流すまで抵抗したことはありません。そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れています。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生児であって、ほんとうの子ではないのです。さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちが懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないのでしょうか。なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちが懲らしめるのですが、霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。

このヘブル書の個所は、本当にすばらしい個所です。昨夜学んでくださった兄弟も、今の個所を引用してくださったのです。だれが書いたのか、だれも分かりません。もちろんイエス様は分かっているはずです。私たちは天国に行ってから分かるでしょう。

このヘブル書を書いた人も、いろいろなことで悩み苦しんだことと思います。その後に、本物をつかんだのではないのでしょうか。

今読みました個所の中で5節の後半、「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである」と記されています。また10節に、「霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです」と。

昨夜、兄弟も言いました。そうです。人間はだれでもいろいろなことで悩んでいます。いろいろな問題、いろいろな悩み、また苦しみに出会うものです。そして多くの場合は、そのようないろいろな問題に直面すると、いかなる答えをも見出すことができずにいるのではないのでしょうか。そして人々は、山のような問題の前に為す術もなく、悩んでいます。

豊かで、何の不自由もなく、人間的には非常に幸せなあるドイツ人の家族を知っているのですが、その奥さんは、多量の薬を飲んで自殺を図ったことがありました。なぜ彼女がそのようなことをしたのか、だれも分かりませんでした。本人でさえも分からなかったのです。また私の親戚のある家族も、非常に豊かで、大変な資産家で、多くの家を持っていましたが、奥さんはイエス様を信じる信じると言いながらも、考えられないほどケチな者だったのです。一人息子は、知能が遅れているために、親の莫大な財産を受け継ぐことが出来なかったのです。親はすでに死んで、その子はある施設の中で一生涯過ごさなければなりません。なぜこのようになってしまったのでしょうか。この問いに対しても、だれも答えられないのではないのでしょうか。

また、何回も日本に来られた P 兄弟は、本当に主を第一にする兄弟だったのです。何十年間も、日本のために祈り続け、イエス様のご栄光だけが現わされるようにという気持ちでした。彼は店をいくつ持っていたかわかりません。それは普通の店ではなくて、日本のデパートのような店を何軒も持っていました。けれども、急に全財産が無くなったのです。それは自分の子どものせいでもあったかもしれませんが、親戚のせいであつたかもしれません。しかし人のせいにするのはおかしいことです。すべては主が許されたのです。彼は言ったのです。「人はみな必要なものをもつ」と。病気になったとしても、「やはり病気も必要なもの。主の責任です」と。あの兄弟は、結局全部失いました。けれども、「前よりも楽ではないか。主に頼ろう」という態度を取り続けたのです。

日本の多くの兄弟姉妹も、アイドリゲンまで行ったことがあります。このアイドリゲンの姉妹会の一人の姉妹のことを思い出します。その姉妹は長い間、主のためにのみ仕えたいと思い、本当に模範的な姉妹でした。けれど、急に脳梗塞で倒れてしまい、半身不随となり、一言も話すことができなくなってしまったのです。何年間も車椅子の生活でした。どうしてそのようなことが起こったのか、だれも分かりません。

このようにしばしば、いろいろな状況の前に、為すべき術を知らず、また、どうしたらそこから逃れることができるか、その逃れ道を見つけることもできず、半ば絶望的な状態に陥ってしまうというようなことが、実際にありはしないのでしょうか。

これはかつてのヤコブの体験でした。ちょっと創世記の 42 章を読んでみましょう。
創世記 42 章 36 節

父ヤコブは彼らに言った。「あなたがたはもう、私に子を失わせている。ヨセフはいなくなった。シメオンもなくなった。そして今、ベニヤミンをも取ろうとしている。こんなことがみな、私にふりかかって来るのだ。」

ヤコブは、息子たちに言ったのです。これは喜びの叫び、勝利の叫びではありません。ヤコブのそれまでの生涯においては、自分自身の意思や自分自身の力に頼って行なったことがたくさんありました。彼は長い間、ずる賢さや卑劣さで、ただ自分の利益ばかりを考えた男でした。けれどそのような、人を欺く者が欺かれたのです。主は、罪を見過ごしに

はなさいません。これはヤコブが学ばなければならなかった厳しい教訓でした。ですからここで、「こんなことがみな、私にふりかかって来るのだ」。すなわち、全てのものが私に反対しているということです。

ヤコブの場合のように、全てが失敗に終わりそうに思える時、いったい何になされるべきでしょうか。いかなる態度をとるべきでしょうか。

まず最初に私たちが注意すべきことは、「全てのことが失敗に終わるということは、ただそのように見えるに過ぎない」ということです。ヤコブの場合もそうでした。なぜなら、ヨセフは確かに今はいないけれど、いつかは必ず会える。シメオンもまた、確かに今はここにいないけれど、いつか必ず会うことができる、ということなのです。

私たちは、人間的な見方をする場合、多くのものを正しく見ることができません。次のように言うでしょう。「全てのものが私に反対している。全てのものが失敗に終わっている」。けれど本当は、その反対が真実です。すなわちこれらの事からは、私たちに反対しているのではなく、私たちのためであるということです。

けれど、このようなことがらを、私たちは、今はそのようなこととして認識することができないような性質の者です。ですから、「隠された祝福」とも言えるのです。

今日の題名は、『隠された祝福』というものです。

なぜ、私はこんなことを経験しなくてはいけないのでしょうか。なぜこんなことが私にふりかかっているのでしょうか。このように、苦しみながら、悩みながらいくら自問自答しても、何の解決法をも見出せないような事ながら、実際には数えきれないほどたくさんあるのではないのでしょうか。

なぜか、何のためか、という問いについては、確かに考える必要があるでしょう。聖書は、少なくとも三つの答えを出しているのです。

1. 全ての背後で支配しておられる主は、人間が救われるために、多くの出来事を起こるがままにさせておかれるということです。
2. 全ての背後で支配しておられる主は、救いにあずかるようになったイエス様に属する兄弟姉妹が変えられるために、それらの多くの出来事を起こるがままにさせておられるということです。
3. 全ての背後で支配しておられる主は、救われた者が本当に主に仕えるため、また用いられるために、それらの多くの出来事を起こるがままにさせておられるのです。

答えは、

まず、救われるため。

二番目、変えられるため。

三番目、用いられるため。

です。

主は、悩んでいる、重荷を負っている、精神的に疲れている人々の救いを計画しておいでになるので、いろいろな出来事を起こるがままにさせておかれます。だれかが病気になるのは、どうしてでしょうか。もちろん必要だからです。全部主の責任です。けれども、主は人間の永遠の滅びではなく、永遠の幸せを望んでおられます。ですから大切なことは、私たち人間が真理なるお方イエス様を認識するようになること、すなわちイエス様に出会うことを希っておいでになるのです。

どれほど多くの人間が暗中模索し、自分たちが真理を知らないのだということに気が付かないでいることでしょう。

ですから、次のように考えるべきです。

人間は救われる前に、一度失われた状態になければなりません。人間は、主が人間を救ってくださる前に、まず自分の失われた状態を認めなければならないということです。物質的な物が満ち溢れ、目に見えるもののがんじがらめになっているため、永遠のものや、生ける神について深く考える時間がありません。このことが現代の特徴です。多くの人は、救い主をもつ必要性に対して、盲目です。たとえそのことを認めざるを得なくなっても、依然として逃げようとするのです。その人たちは、静かになって、人生の意味を考えたり、死後の世界を深く考えたりすることをしたがらないのです。

このことこそ、主が多くの不愉快なこと、困難なこと、理解することができないことを、私たちに与えられることの理由なのです。

このような主の導きの目的は、

- ・ご自身のもとに引き寄せること、
- ・また、赦しと人生の内容を与えてくださることにほかならないのです。

みことばから二つの実例、すなわち、旧約聖書と新約聖書の中の例を見てみたいと思います。二人の放蕩息子と言ってもいいかもしれません。

一人の放蕩息子は、マナセ王でした。歴代誌第二の 33 章を読みましょう。

歴代誌・第二 33 章 2 節

彼は、主がイスラエル人の前から追い払われた異邦の民の忌みきらうべきならわしをまねて、主の目の前に悪を行なった。

「彼は」、すなわちマナセ王は、です。

9 節、10 節

しかし、マナセはユダとエルサレムの住民を迷わせて、主がイスラエル人の前で根絶やしにされた異邦人よりも、さらに悪いことを行なわせた。主はマナセとその民に語られたが、彼らは聞こうとしなかった。

耳があっても、聞く耳がなければ、また従おうとしなければ悲劇的なことになります。結果は次のようなものでしょう。

11節、12節

そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。しかし、悩みを身に受けたとき、彼はその神、主に嘆願し、その父祖の神の前に大いにへりくだった。

「バビロン」つまり外国です。大いにへりくだる者は幸せです。確かに、人間は後悔します。簡単に、「悪かった」と言います。けれど大いにへりくだることとは違います。大いにへりくだる人々が捜し求められています。結果はすばらしいからです。

13節

神に祈ったので、神は彼の願いを聞き入れ、その切なる求めを聞いて、彼をエルサレムの彼の王国に戻された。こうして、マナセは、主こそ神であることを知った。

「神に祈ったので」、つまり大いにへりくだった者として、です。このマナセ王は、神のみことばに聞き従おうとしなかったため、主は仕方がなく、やむを得ず多くの苦しみを通して彼を導くしか方法がなかったのです。ですから、突然全てのものが失敗するように見えましたが、それは決して偶然ではなく、その背後に主が立っておられ、全てを御手の内に治めておられたのです。

今読みました11節を、もう一度読むと分かるでしょう。

11節

そこで、主はアッシリヤの王の配下にある將軍たちを彼らのところに連れて来られた。彼らはマナセを鉤で捕え、青銅の足かせにつないで、バビロンへ引いて行った。

「アッシリア」、つまり敵国です。全部主の責任だったでしょう。主が連れて来られたと書いてあるのです。これは偶然ではなかったのです。そしてこれは、マナセの、逃亡生活の終わりを意味していたのです。

全てが失敗しただけではなく、これは本当の終わりにほかなりませんでした。けれど、そのような主の導きの目的は、のろいや滅びではなく、永遠の救いにあずからせるために、心の目を開いてくださることでした。

彼は大いにへりくだりましたので、一度敵の虜になってしまい、捕虜になってしまったのですが、自分の国に帰れるようになっただけでなく、再び王になったのは、普通考えられないことです。

多くの苦しみを通して放蕩息子であるマナセ王は、このように考えられないほど、回復されたのです。終わりではありません。大いにへりくだれば、主は道を開いてくださるに違いないのです。

今度は、新約聖書の放蕩息子のことをちょっと考えましょう。みなさんご存じですが、新約聖書の放蕩息子は、自信に満ちて親の家を去ってしまったのです。意識して、彼は、自分が選んだ道に出てしまったのです。隣の町に行っても良かったのに、隣の国ではなく、

遠い国まで行ったのです。彼は何ものにも束縛されず、自由に自分の人生を楽しもうと思ったのです。自分自身の道を行きたいと思う者に対しては、主は好きなようにさせられます。自分勝手な道に行きたければどうぞ、と。けれども、必ず帰るようになります。放蕩息子の父はそれが分かったのです。首を長くして、今日帰るのではないかと必ず毎日待っていたことでしょう。

そのとき、息子には最初全てのことが望み通り上手くいくように思えたにしても、やがて全てのことが失敗に終わる時がやってくるのです。そしてその結果、突然全てのものが自分に逆らうかのように思われてくるのです。間もなく金を使い果たし、それまで友だちと思われた人々からは捨て去られることになってしまったのです。全てのことが失敗に帰したことになるのです。

ルカの福音書 15章14節、15節

何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて、豚の世話をさせた。

「大ききんが起こり」と記されていますが、偶然に起こったものではありません。主のご計画でした。「豚の世話をさせた」、このことはユダヤ人にとって、一番嫌な仕事です。

16節

彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。

けれど、この導き、すなわち、この深みへと導かれたことによって彼は、単に自分自身に立ち返っただけではなく、そのことによって父の住まいへ戻ることになり、その結果はまことに満ち足りた幸いな人生へ入ることができたのです。

多くの場合、人生の途上には、恐ろしくたくさんの困難が横たわっていますが、主は常に一つの目的をもっておられます。つまり私たち人間をゼロの点にまで低くさせ、あるいは破産させること。この方法が主の取られる方法であり、その限りにおいて、全てのものは自分の助けとはなりません。それによって心から悔い改めることになり、さらにイエス様を信じて、主のみもとに行くことが可能となるのです。

使徒行伝の中に書かれています。

使徒の働き 2章37節、38節前半

人々はこれを聞いて心を刺され、ペテロとほかの使徒たちに、「兄弟たち。私たちはどうしたらよいでしょうか。」と言った。そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。」

大いにへりくぐれば、主はあふれるばかりの祝福を与えてくださいます。

なぜか、どうしてか、何のためかとか考えると、今読みましたように、まことの救いにあずかるために、低くされたり、破産等の経験を通ることが必要だったのです。

二番目の答えは、背後で導いてくださる主は、信じる者が変えられるために、また、主の御姿に変えられるために、(昨夜学びをされた兄弟が言われたのですが、その通りで、)多くの出来事が起こるがままにさせておられるのです。言うまでもなく、未信者だけではなく信じる者もまた、いわゆる一般的には運命の為すわざなるものを経験します。信じれば問題が無くなるわけではありません。信じたとしても、やっぱり悩みがあります。困ったこともある、と聖書ははっきり語っているのです。

すなわち、信じる者も失望落胆し、なぜこんなことが起こるのかどうしても理解することが出来ない場合に遭遇します。

では、なぜ主は、信じる者が厳しい試練に会うことを許されるのでしょうか。

それは、

- ・彼らの教育のため。
- ・彼らの聖めのため。
- ・彼らがイエス様の御姿に変えられるため。

です。それをはっきり知るために、二箇所読んでみましょう。

ローマ人への手紙 8章 28節、29節。みなさん暗記しているみことばですが、28節だけではなく、29節も続いて読むべきです。

ローマ人への手紙 8章 28節、29節

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

「すべてのことを」、「すべて」のみことばに、アンダーラインすべきではないでしょうか。すべてのことを働かせて、(損としてではなく、益としてくださることを、私たちは確信する)です。私たちの人生の途上にあるもの全て、また、私たちの人生の中に入り込んで来るもの全ては、主によって用いられており、無価値なもの、無目的なものは、一つもありません。

確かに、だれもが過去を振り返ってみると、ああやはりダメだった。横道だったと思うでしょう。しかし主の目からご覧になると、真っ直ぐなのだと思えます。

大切なことは、私たちが新しく造り変えられること、主イエス様の御姿に似た者となることです。

今話しましたように、私たちの人生の中に偶然というものは何一つありません。全ての

背後にイエス様が立っておられ、主がそれぞれの場合に応じて、大切な導きをなしていただきますのです。

「全てが益となる」。このことを私たちは常に新たに覚えるべきではないでしょうか。最も良きことは、私たちが「造り変えられること」ではないでしょうか。造り変えられること、主の御手によって練られることは、痛みを伴うことがあります。しかしそれは、自らが砕かれること無しには、あり得ないことであるからです。人はその時、失望、落胆し、力を失い、自暴自棄に陥りがちですが、このようなことは、自分の思い通りにならない場合、または、目先のことしか考えない場合に起こることです。その時、今読みました29節をおぼえるべきです。

29節

神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。

イエス様は、この目的をもって背後で導いてくださるのです。

主が目指しておられるご目的は、何とすばらしいものでしょう。この目的から常に目を離さないことが、非常に大切です。

司会の兄弟の読まれたヘブル書12章3節です。

ヘブル人への手紙 12章3節

あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

「このような反抗を忍ばれた方のことを」、すなわち「十字架の上で犠牲になられたイエス様」「父に捨てられたイエス様」のことを、です。イエス様から目を離しては、なりません。

10節後半

霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずかせようとして、懲らしめるのです。

それは決して天罰ではありません。昨夜学んでくださった兄弟も何回も言ったのです。運命ではない。天罰ではない。愛されている証拠ですと。それが分かると、とても嬉しくなります。

結局主は、ご自分に属している者たちを限りなく愛してくださるので、まさにそのために私たちを懲らしめ、教育なさるのです。主の教育は、私たちが主の聖さにあずかるように、ご自身のみもとに引き寄せたく思っただけのことです。私たちの主は完全であられ、主の導きもまた完全です。私たちは主のなし給う全てを理解することが出来ません。挫折してしまう危険に直面し、また、自分自身に同情してしまうというような場合も多くあるのではないのでしょうか。

- ・なぜ、私はこんなことを経験しなくてはならないのか。
- ・なぜ、次から次へとこんなことが私に起こるのでしょうか。

・なぜ、私はこんなにたくさんの困難や理解できないことを経験しなくてはならないのでしょうか。

へブル人への手紙 12章11節

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になると、これによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

現実だけを見ると確かに苦しいです。面白くありません。疲れます。しかし、「後になると、…」。

私たちが主といっしょになると、今の人生のいろいろな苦しみ、困難について考え、きっと驚いて、感謝するでしょう。そして主を礼拝せざるを得なくなります。「やはり苦しんだことは良かった。主のなさることは完全だった」と必ず言わざるを得なくなるのでしょうか。ここで大切なことは、そのときは、一時的に悲しく思われるものですが、しかし、後になると、それが結果的に幸いになるということです。

さらに、私たちは次の事がらを覚えましょう。すなわち、私たちは、決して主のための実験用モルモットのようなものではなく、主が常に最善のみを考えておられる最愛の子であるということです。ですから、このへブル書12章の中で、「わが子よ」と書いてあるのです。たとえ、実際に全てのことが失敗したとしても、私たちは主によって愛されているということを知ることができるのです。

また、主の試練、主の懲らしめこそ、主の愛の証拠です。私たちは今、そのことを理解することができなくても、しかし、後になると、そのことを主に感謝し、礼拝するに違いありません。

ダビデも同じようなことを経験したのではないのでしょうか。一番長い詩篇ですが、119篇の67節に、次のように書かれています。

詩篇 119篇67節

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります。

苦しんだのは結局良かった、とダビデは言えたのです。

人間はなぜいろいろな事で悩み、苦しむかと言いますと、結局、救われるために必要であるからです。医者が必要とする者は病人だけです。わたしを必要とする者は、精神的に悩むようになり、罪滅ぼしのためにどうしたらいいかと分からない人々だけだ、とイエス様は言われました。

また、どうしてイエス様の救いにあずかるようになった人々も、相変わらず悩まなくてはいけない、苦しまなくてはいけないのでしょうか。答えは、「変えられるため」です。

最後にもう一つの答え。つまり「用いられるため」に必要なのです。

せっかく救いにあずかるようになったにもかかわらず、多くの兄弟姉妹は実を結ばない木のようにになってしまう場合もあるのです。主は彼らを用いることがおできになりません。その原因はいったい何なのでしょう。彼らは、主なしでも何とかやれる、と考えているからです。もちろん彼らは、無意識のうちに、やれると考えているのです。けれども、彼らは自分自身の力と自分自身の知恵に拠り頼んでいるのです。確かに多くの信じる者は、主のために何かをやりたい。主のために一生懸命に何かをやりたいと思いながら、このこと、あのことをしたいと主に願ったりするのです。彼らはこのことや、あのことを自分がしたいために、結局イエス様を利用しようとしているのです。

しかし「主は信者をお用いになりたい」と思っておいでになります。ご自分の器として、単なる道具として用いようと望んでおいでになります。永遠に残る実を結ぶ奉仕は、主のための私たちの努力ではなく、私たちを通して、主ご自身がなされるみわざでなければなりません。このような時に多くのことが私たちに逆らっているように思われたり、主が私たちを厳しく取り扱われたりする経験を通し、私たちが砕かれなければならないのです。

二つの例を見て終わりたいと思います。

*一つの例は、みなさんご存じなのですが、ペテロです。

ペテロの特徴は何であったかと言いますと、いわゆる「自信」です。「独立心」です。彼は、自分の能力に自信を持っていました。主はそのような人々をお用いになることはできません。

ルカの福音書 22章31節から33節

「シモン、シモン、見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。しかし、わたしは、あなたの信仰がなくなるないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」シモンはイエスに言った。「主よ。ごいっしょになら、牢であろうと、死であろうと、覚悟はできております。」

悪魔は祈って、そして「わたしは悪魔の祈りを聞き届けた」。「主よ。ごいっしょになら…覚悟はできております」。自信と独立心に満ちたペテロ。

34節

しかし、イエスは言われた。「ペテロ。あなたに言いますが、きょう鶏が鳴くまでに、あなたは三度、わたしを知らないと言います。」

「きょう」、(半年後ではありません。)
「きょう」です。「シモン、シモン、見なさい。サタンが、あなたたちを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。(33節)」。そしてわたしはそれに反対しません。これは、まことに厳しく、つらいことでしょう。しかしあなたが破産して、本当に自分自身に絶望するために、どうしても必要なことなのです。

ここで注意していただきたいことは、いろいろな人間と秩序です（ルカ 22：31～33）。今の聖句によると、先ず「悪魔」、二番目「わたし」、すなわちイエス様。第三番目「シモン・ペテロ」および、あなたの「兄弟たち」。こういう順番になっています。

主はペテロを通して、彼の兄弟たちを、初代教会の兄弟姉妹たちを、強めようと思われました。ペテロを用いようと望まれました。けれど、そのためにペテロは砕かれることがどうしても必要でした。ですから悪魔がペテロを攻撃することになるのですが、しかしその時でも主は、絶えずペテロのために祈られたのです。したがって、悪魔は自分がしたいことを何でもするということはできません。

私たちは完全に主の御手の中にいるのであり、それは永遠の安全、その意味です。ですから主は、悪魔とペテロの間にお立ちになられたのです。

ペテロは、本当にすべて失敗してしまいました。彼は最後の土壇場に立たされたのです。そこにはもはや一筋の希望の光も差し込まず、すべての望みが消え失せました。まったく絶望的な状態が支配しました。けれども、この訓練はどうしても必要でした。ペテロは、もはや自分の力に頼り頼むことができなくなってしまったのです。そこで初めて、主は、ペテロをお用いになることがおできになりました。そのよい例が五旬節ではないでしょうか。

その時ペテロの簡単な証しは、旧約聖書の聖句を引用しただけなのですが、このペテロの証しを通して三千人以上の人々が救われた、とあります。これは立派な証しでもないのに、三千人も救われるとは！

その中で、最も大きな奇蹟は、ペテロは傲慢にならなかったことです。自分の失敗を忘れられなかったのです。やはり彼が用いられるために、どうしても必要だったからです。

イエス様を知らないと言った時、彼は、外へ行って激しく泣きました。その時だけではなく、それからの三日間は真っ暗やみでした。「食べることも寝ることもできない。もうおしまい」。悪魔は誇ったでしょう。あいつはもうダメだ、と。けれどとんでもない話です。この失敗がなかったなら、彼は必ず傲慢になって用いられなくなったに違いありません。

*最後のもう一つの例は、パウロではないでしょうか。結局パウロもペテロと同じように、深みを通って行きました。すなわち三日間、ペテロと同じように、暗やみの中に生きたのです。そのことを後になって、パウロは次のように証したのです。

コリント人への手紙・第二 3章5節、6節

何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというわけではありません。私たちの資格は神からのものです。神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

私たちはみな、実を結ぶ秘訣を知っています。すなわち、自分自身を否定して、自分に対して死ぬことです。もちろん、おもにイエス様についてのみことばなのですが、私たちにも当てはまるのではないかと思うのです。

ヨハネの福音書 12章24節

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのみかたです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

どこにも、多くの重荷を背負っている人、いかなる逃れ道をも見出せず、絶望的な状態になっている人々があります。どうして、私はこんなにたくさんの困難を経験しなければならないのか。どうして、私は失敗してしまうのだろうか。

おそらくそれは、まだはっきりとした救いの確信を持たず、イエス様こそ私のもの、かけがえのないもの、と言うことが確信できないからではないでしょうか。

もしかするとそれは、あなたの救い主が、あなたをご自分に似た者に造り変えようとしておられるからではないでしょうか。大切なのは救われることだけではなく、聖められることです。

或いはそれは、あなたが今まで主を利用しようとしていたけれど、今や主があなたを主の御手の中に、ご自身の器としてお用いになろうとしているからではないでしょうか。

旧約聖書申命記の中で面白いことばが書かれています。イスラエルの民の経験についてです。

申命記 8章15節

燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、

道を塞ぐ岩。すなわち障害物から、或いは理解できない困難や、私たちが感謝できないほどの心痛、すなわち心の痛み、これらのものから、主は水を湧かせようとしておられるのです。

このような経験を通して私たちは、主のみもとに行くのであり、このような経験を通して私たちは、祝福されるために祝され、また、いのちを与えられるのです。生ける水の川となって私たちから流れるべきであるとあります。

旧約時代に、主はご自分の民に向かって次のように言わざるを得なかったのです。非常に悲しいことです。エレミヤという預言者を通して、主は次のように言われました。

エレミヤ書 2章13節

わたしの民は二つの悪を行なった。湧き水の泉であるわたしを捨てて、多くの水ためを、水をためることのできない、こわれた水ためを、自分たちのために掘ったのだ。

「わたしの民」(異邦人ではなく)、主を知らない人々でもないのです。そればかりか、

17章13節

イスラエルの望みである主よ。あなたを捨てる者は、みな恥を見ます。「わたしか
ら離れ去る者は、地にその名がしるされる。いのちの水の泉、主を捨てたからだ。

「わが民は二つの罪を犯す。一つは、湧き水の泉であるわたしを捨てたこと。第二は、水
をためることのできない、こわれた水ためを、自分のために掘った（2章13節）」。

このようにして、主は、悔い改めて立ち返ることを切に求められました。

イエス様を知らない人々は、悔い改めて主のみもとに立ち返らなければなりません。救
われるために。

イエス様を知るようになった人々は、主のうちにとどまるために、また用いられる道具
となるために、同様に悔い改めて、立ち返らなければなりません。

イエス様のうちにとどまる者だけが、主と結び付いているのであり、このいのちの泉の
通りよき管となることによって、イエス様はご自身を現わすことができになるのです。

私たちは鉄から鋼を作ることをよく知っています。すなわちそれは、非常な高温によっ
てのみ可能です。それと同じように、主は不十分な人間を満たされた人間となさるために、
多くの困難や試練を用いなければならないことを、よくご存じです。今のこの時の試練は
まさに、天国に至るための準備期間のものにほかなりません。

主は何ものも御手から失われません。主はとこしえに、すべてを支配なさるお方です。
暗やみの夜にも、困難な涙の時にも、主の御手は私たちを守ってくださいます。

失望、落胆することも必要です。そのような者はなぐさめられ、喜ぶことができます。
なぜなら、主はとこしえに主であられるからです。そして主は決して過ちを犯されません。
私たちには理解できないことがたくさんあるとしても、主は私たちにとって必ず、最も益
となることを考えていてくださるのです。

私たちは、一日のうちに何回も徹底的に主に信頼できるように祈るべきです。私たちは、
主が助けてくださること、祝福してくださることを主に願いますが、反対に、主が私たち
に何かを要求なさり、ご自分の器として私たちを用いようとなさる時に、私たちは簡単に
挫折してしまうのです。

私たちはみな次のように祈りたいものです。

主よ。私をあなたの器にしてください。

私が、私を憎む人を愛することができるように。

私をのけ者にする人々を助けることができるように。

私が、私をのろう人々を祝福することができるように。

パウロは確かに多くのことで悩みました。けれども彼だけではなく、彼を通して導かれた
人々は、一致して言うことができたのです。

ローマ人への手紙 8章18節

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

取るに足りないものと私は考えます、と。

コリント第二の手紙の4章は、当時の兄弟姉妹の証しです。

コリント人への手紙・第二 4章8節から10節

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

そして、

16節から18節

私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

旧約聖書の、ハバククという預言者は、ある意味で変わった男でした。彼は、悩みながら大いに喜んだのです。目に見える現実を大切にしようとしなかったからです。

ハバクク書 3章17節

そのとき、いちじくの木は花を咲かせず、ぶどうの木は実をみのらせず、オリーブの木も実りがなく、畑は食物を出さない。羊は囲いから絶え、牛は牛舎にいなくなる。

結局、こんなことがみんな私に降りかかってくるのだ。もう大変だ、と彼は言わなかったのです。

18節、19節

しかし、私は主にあって喜び勇み、私の救いの神にあって喜ぼう。私の主、神は、私の力。私の足を雌鹿のようにし、私に高い所を歩ませる。

悩みながら喜ぶことこそが、人を惹きつける証しではないでしょうか。

了